



月は照っている

宮城県 関千紘

保育園からの帰り道。月明かりが綺麗な夜だった。四歳の息子が突然、空を指差して。

「ママー。お月様って、僕のこと好きだからお家までついてくるのかなあ。」

ついてくる？息子にとって、月はまるで友達かのような見え方であることに驚いた。

「そうだねえ。きつと、けいちゃんが、かわいいから、お庭までついてくるんだよ。」

そんな会話をしながら、温かい気持ちに、一日の疲れも吹き飛んだ。

帰宅するやいなや、急いでリビングのカーテンを開けた息子は、庭の上で光る満月を見つけ、ああ、やっぱりとも言いたそうに、にこつと微笑んだ。

翌日の保育園の帰り道も、月がよく見えた。だが、息子の様子は少し違っていた。

あれ？

「あのね、今日、よりちゃんとケンカしたんだ。お月様は、よりちゃんが好きだから、よりちゃんの家に来たんだって。僕の家にも来たんだよって言ったのに。」

あらまあ。ふふふ。

「お月様、きつと忙しかったねえ。よい子の家はきつと全部行きたかったんじゃないかなあ。」

すると、はつと息を飲み込んだ息子は庭に出て、お月様に届けとばかりに、

「お月様、もう、よりちゃんの家に行つていいからねー。」
顔が真っ赤になるくらいの大声で叫んだ。

私たちの周りは、いつも自分以外の存在で溢れている。気にも留めなかった。なぜ、息子と手を繋ぎ、親子の影を愛おしいと思える帰り道があるのか。息子は、この当たり前前に見える月

明かりを、自分なりに解釈し、幸せな気持ちに繋げていたのだ。

月は照っている。自分が誰と、何と繋がっているのか。どう繋がりたいのか。月を見上げる息子の横顔が、私に気付かせてくれた晩だった。

〔審査評〕「ママー。お月様って、僕のこと好きだからお家までついてくるのかなあ。」と四歳の子供の真剣な質問に驚きながらも「そうだねえ。きつと、けいちゃんが、かわいいから、お庭までついてくるんだよ。」と真摯に返事するお母さん。翌日はお月様が自分のお家に戻ってくるか心配する子供とそれにも真摯に返事するお母さん。二人はお月様を通して感性をつなぎ、母子の愛をつなぎ、幸せをつないでいます。そんなほのぼのとした情景を思い浮かべられる中に、つながること温かい気持ちになれることを教えてくれ、つながることが未来を拓くキーワードであることに気付かせてくれる秀逸な作品です。

吉田幸司